

平成19年度率先実行大賞 受賞取組概要

応募を受け付けた順に掲載

部局名		活動テーマ	グループ名	取組概要
1	病院事業庁	(2) ころ癒されるワンワンドクター回診	ころの医療センター 地域連携グループ	ころの医療センターでは、認知症の患者さまに、外部からの「刺激」を受けて自分自身を少しでも取り戻してもらおうと、昨年、動物介在活動を、病院ボランティア、保健福祉事務所職員（獣医師）と協働で取り組んだ。今年度はこれを更に発展させ、動物とのふれ合いを通して、患者さまに内在するストレスの軽減や自信を取り戻し精神的な健康を回復につなげようと、治療の補助に新規プログラムの動物介在療法を開始した。この療養は、診療報酬が加算されるため、病院の医業収益の確保にもつながっている。
2	政策部（伊賀）	(12) 三重県伊賀庁舎・子ども参観日	伊賀県民センター チーム・S	伊賀庁舎では、子どもたちに、普段なじみのない県の仕事をに興味を持ってもらい理解を深めてもらうこと、働くことの意義や生きがいについて考える機会にすることを目的に、夏休みに「子ども参観日」を実施、小学生37人が参加した。 6班に分かれ、庁舎内を担当職員が先導し、各階事務所などでそれぞれの所属長や担当者から説明。職員と同じ台紙で作った名刺で生まれてはじめての名刺交換などで職員と子どもの相互理解が深まったほか、参観の最後に子どもたち作成の通知表で、職員や庁舎をチェックする機会を持った。
3	政策部	(23) みんなでつくるイラストマップ「伊勢路図絵」	東紀州対策室 伊勢路イラストマップ探検隊	熊野古道の世界遺産としての特徴を活かし、来訪者と地域の人たちとの交流により地域の活性化を図るため、県職員、公募ボランティアスタッフ、熊野古道沿線の市町及び住民が協力して、伊勢から熊野への連続したイラストマップを作成し、「平成の熊野詣」ができる環境を整えている。マップのコンセプトは、「全行程170kmを実際に歩いて取材する」「自分で見たものを中心に、イラストマップを作成」など。 今年度には、伊勢から熊野速玉大社まで34枚を完成させ、「伊勢から熊野へ『平成の熊野詣』ふれあいウォーク月間」（スタンプラリー）を実施した。60歳代を中心に、全国から1700名を超える参加申込みがあった。
4	健康福祉部	(74) 松阪牛文化ミュージアム	松阪食肉衛生検査所 検査課・試験課	松阪食肉衛生検査所では、県民に食の安全・安心確保システムへの理解を深めてもらうため、平成14年度から、全国的にも例のない「見学者の受入れ」を行っているが、さらにこの取組を充実させるため、松阪牛の生産から消費までを松阪牛の文化ミュージアムと捉え、最高級ブランド和牛「松阪牛」の持つ「文化力」という視点でこれまでの見学事業を再編した。 食肉の安全や、松阪牛の文化・歴史・美味しさについて学ぶ松阪食肉衛生検査所を「文化科学館」、松阪牛が松阪肉になるプロセスを見学し、命の大切さについて学ぶ隣接の（株）三重県松阪食肉公社を「生命感動館」と名付け、従来の見学に加え、松阪牛の文化・歴史に関する語り、試験室見学、内臓の解剖等の特別プログラムを実施し、好評を得ている。
5	病院事業庁	(78) 顧客の視点からの医療現場改革 ～ころはひとつ～	ころの医療センター運営調整部	病院の永遠の課題でもある「患者待ち時間の長さ」その原因は、2ヶ所しかない会計窓口には様々な顧客対応が集中していることと気づいたころの医療センターでは、総合案内を正面玄関に設置し、従来会計窓口集中していた様々な問い合わせなどに対応した。その体制は、延べ10人の職員が、午前中をそれぞれ2時間ずつ交替で担当した。 その際、顧客の要望等を「気づきノート」に記入し、重要事項についてはレッドカード（上司に報告する赤紙）も用意し、案内設置後も、たゆみない顧客志向の外來環境を改善し続けている。

平成19年度率先実行大賞 受賞取組概要

応募を受け付けた順に掲載

部局名		活動テーマ	グループ名	取組概要
6	教育委員会	(114) 地域で育てる子どもたち～小・中・高・地域の連携	県立飯南高等学校	<p>旧飯南郡唯一の県立高校である県立飯南高等学校は、地域と一体となった学校づくりを目指すため、平成11年度に全国初となる中高一貫教育を導入するとともに、普通科を総合学科に改変、地域の小中学校と教育について連携するなど教育内容の改善・充実を図ってきた。</p> <p>そして、地域の小・中・高等学校の教育全体の「目指す子ども像」を策定、共有し、その実現のため、教職員が小中学校の教育活動に参加するなど協働を展開。地域との一体化を更に進めるため、今年度からは、コミュニティ・スクール推進事業委員会を設置し、地域住民の声を学校運営に反映させる仕組みを作った。</p>
7	農水商工部	(126) 風となつて、土に学ぶ～地元学による文化力への取組～	地元学ワーキンググループ	<p>「地元学」とは、地元の人が主体となって、地元外の人々の視点や助言を得ながら、地元のことを客観的に再認識し、地域のあり方を見つけていく手法の一つ。</p> <p>松阪地域では、本年、松阪農林商工環境事務所、松阪県民センター、松阪保健福祉事務所、地域づくり支援室、大台町・多気町の職員が「地元学」ワーキンググループを結成し、大台町・多気町の4地区で、地元の方々や地域を歩き、地元学に取り組んだ。</p> <p>このことが、地元の方々の地域再発見につながり、「地域を何とかしたい」という熱い思いを生み出すなどの成果につながっている。今、本県が推し進めている「文化力」の発想を具現化した取組と言える。</p>
8	科学技術振興センター	(160) 熊野古道おもてなし商品の共同開発～産学官共同による地域資源の高付加価値化と有効利用等による商品化への取組～	科学技術振興センター熊野古道特産品共同研究開発事業プロジェクトチーム	<p>科学技術振興センターは、平成17年度から3ヶ年計画で、地域の産業を活性化し、『熊野古道』を訪れる観光客へのおもてなし商品を開発することを目的として、生産者、民間企業、高等教育機関、行政そして研究機関等多様な主体と連携しながら、特別美味しい完熟カンキツ等高付加価値化商品、未利用地域資源の有効利用商品、さらに「熊野古道」をアピールする新商品の開発に取り組んだ。</p> <p>この結果、3ヶ年のおもてなし商品開発数は、現時点で9件（最終11件予定）となっている。（亜熱帯果樹「アテモヤ」、アッサム紅茶、早生完熟高糖度うんしゅうみかん、亜熱帯果樹「アテモヤアイスクリーム」、カンキツ釉薬利用陶磁器、「春光柑」香りの『熊野古道クリーム』、カンキツ「タチバナ」香りの入浴剤等）</p>
9	健康福祉部	(168) 肢体不自由児のネクスト50（フィフティ）!!!～こどもたちとの「やくそく」の実現に向けて～	草の実リハビリテーションセンターチーム『草の実』	<p>草の実リハビリテーションセンターは、児童福祉法に基づく肢体不自由児施設で、かつ県内で唯一の小児整形外科、小児リハビリテーションを専門とする病院である。</p> <p>同センターでは、今年度開設50周年を迎え、新たな50年に向けさらに質を高めていくため、全職員で「あり方検討」を実施。「通院者へのアンケート調査」や「退所者への追跡調査」の結果に基づき、徹底的に議論を行った。それが、多くの改善提案を生み出し、自主勉強グループやワーキングの活動を通じ、院内研究発表会の開催、保護者との「食の交流会」の改善、福祉機器のリサイクルの実施等の前向きな活動につながっている。</p>
10	教育委員会	(182) 人が育つ！学校が育つ！地域が育つ！わくわくコミュニケーション	県立桑名北高等学校	<p>学校が荒廃した5年前。その原因を生徒の内面から探っていくと、人間関係に悩む生徒や、直面した問題を解決できず自分を見失う生徒、複雑な家庭環境に悩む生徒の姿があった。</p> <p>そこで学校では、生徒が自己肯定感や他者受容を体感することにより様々な気づきを得ることができるように、コミュニケーション授業や、年間を通じた生徒と保育園児との交流授業などを実施。</p> <p>これらを通じ、生徒には、あたたかな人のつながりを感じ、自分を信じて社会へ歩み出す力が培われている。</p>